

書 評 と 紹 介

樋口直人・稲葉奈々子・丹野清人・
福田友子・岡井宏文 著
『国境を越える』
——滞日ムスリム移民の社会学』

評者：小島 宏

本書は在日ムスリム（イスラーム教徒）と帰国後の元在日ムスリムに関する社会学的な実証研究をまとめたものである（著者たちは「滞日」ということばを用いているが、以下において評者は文字通りの意味で「在日」ということばを用いる）。本書のように特定の外国人集団について帰国後の追跡調査を行った研究までも含む書物は国内ではブラジル人に関する若干のもの以外ほとんどないようであるし、欧米でもトルコ人やメキシコ人に関するもの以外あまり多くないので、国際的にみても独創的な書物と言えよう。最近、在日ニューカマー外国人の社会学的研究というと数の上で多いブラジル人、中国人、フィリピン人等に関するものが多い中で異色の書物である。もっとも、出入国管理法が改正されて日系ブラジル人が急増し始めた1990年代初頭には、超過滞在者を含む在日ムスリム人口が10万人を超えていたと推定され、ニューカマー外国人の中でパキスタン人、バングラデシュ人、イラン人、インドネシア人といったムスリム人口大国出身男性が数の上で大きな位置を占めていたことから（Kojima 2006）、

各国出身者の研究もある程度なされていた。

本書の研究対象の一部は1990年代に帰国した元在日ムスリムであるが、筆頭著者の樋口氏は当時バングラデシュ人を中心とする在日ムスリムの支援活動に携わっていたようであるし、1990年代後半には共著者の丹野氏らとともにハラル（ムスリムが食べても良い）食品店・レストランの先駆的な調査（第4章の基礎）をしたことから帰国前の在日ムスリムやその関係者との知遇を得たものと想像される。しかし、丹野氏は第2章のもとになった論文を本誌に掲載した頃からむしろ在日ブラジル人労働者の研究に集中し、故梶田孝道教授と同門の樋口氏とともに在日ブラジル人に関する『顔の見えない定住化』を著している。従って、本書の両氏の著作でも在日ブラジル人に関する研究を通じて得られた知見が随所に生かされている。

これに対して、稲葉氏の場合はムスリムが多数を占める在日移民等の医療支援に関する研究をしていたこともあってか、帰国後の元在日ムスリムについて樋口氏・丹野氏との共同研究を実施するようになったものと思われる。福田氏も当初は在日ブラジル人の研究を志していたとのことであるが、個人的な事情もあり、在日パキスタン人のエスニック・ビジネスの研究をすることになったようである。岡井氏は評者が実施できなくなった「在日ムスリム調査」を店田廣文教授の下で実施した実働部隊の中心人物で、第6章のもとになった「全国モスク調査」に続くフィールド調査を続けている。以上のような背景をもつ著者たちにより執筆された本書の構成は以下の通りである。

序章 滞日ムスリム移民の軌跡をめぐる問い

(樋口直人)

第1部 移住と定住の分岐点

第1章 親族集団から個人へ—現代の遊牧民・トルコ系シャーサバンの日本出稼ぎ (稲葉奈々子)

第2章 創り出される労働市場—交錯する求職ネットワーク (丹野清人)

第3章 「ガテン」系への道—労働への適応, 消費への誘惑 (樋口直人)

第2部 移民コミュニティと越境するネットワーク

第4章 越境する食文化—滞日ムスリムのビジネスとハラール食品産業 (樋口直人)

第5章 トランスナショナルな企業家たち—パキスタン人の中古車輸出業 (福田友子)

第6章 イスラーム・ネットワークの誕生—モスク設立とイスラーム活動 (岡井宏文)

第3部 ふたたび越境するという経験—故郷に帰ったムスリム移民

第7章 滞日経験のバランスシート—帰国の経緯とその後の状況 (樋口直人)

第8章 消費社会のスペクタクルとトランスナショナリズムの逆説—バングラデシユの移民家族と開発される欲望 (樋口直人・稲葉奈々子)

あとがき

「滞日ムスリム移民の軌跡をめぐる問い」と題された序章は本書全体の導入部分であるが、統計的・制度的概観とともに、実質的な編者である樋口氏自身にとっての本書の学問的・個人的位置づけが書かれている。「この小さな本が出発点としたいのは、このような生身の人間としての『外国人労働者』が積み重ねてきた途方

もない経験の束に対する感性である。……渡日—滞日—離日の各局面で、彼らは不利な状況を克服するべくさまざまに格闘してきた。こうした経験を描き出すことで、越境する存在としての移民のダイナミズムを再認識させることになるだろう」(p.12)と本書の出発点と目的を述べている。また、「これまでの日本の研究は、あたかも渡日—定住の局面だけで移民現象が完結するかのように扱われてきた。しかし、……そこ(帰国後の状況)に目を向けないできた従来の研究は、世界の半分しかみていないに等しい。第3部では、ムスリム移民がもつもう一つの世界—帰国後の状況—を中心に滞日経験の意味を考える……」(p.18)とさらなる目的を述べているが、評者も同感である。

樋口氏は、以下の各章のモチーフとして「さまざまな経緯で日本に来た青年たちが、慣れない環境に戸惑いながらも必死に生きてきた、そんな等身大の世界からこの20年を振り返ること」(p.20)を挙げ、その際に採用する2つの手法として①個々人の物語とネットワークのダイナミズムの重視と、②トランスナショナリズムが示唆する超国家的な生活世界へのアプローチを挙げている。

「移住と定住の分岐点」と題された第1部は第1～3章から成るが、「第1章 親族集団から個人へ—現代の遊牧民・トルコ系シャーサバンの日本出稼ぎ」は日本に20人以上の出稼ぎ労働者を送り出した、イランのトルコ系部族「シャーサバン」(イスラーム革命後は「イルザヴァン」と呼ばれている)のテヘラン南部のクラン「アフマッドルー」による親族ネットワークを通じた連鎖移動、経済活動、生活について論じている。帰国後の状況についてもかなりの紙幅が割かれ、本書全体のミニ版という感もある。しかし、この集団の経験がイランから日本への元出稼ぎ労働者全体の中で平均的なものであつ

たのかどうか分からない。

「第2章 創り出される労働市場—交錯する求職ネットワーク」は「職長ネット」,「建設ネット」,「エスニックネット」から成るムスリム労働者の求職ネットワークについて論じている。本誌に1998年に掲載された論文に依拠しており,ムスリム労働者の転職・転居行動とその要因について緻密で説得力のある議論が展開されている。資料価値は高いものの,同一著者が本誌掲載論文の中でも論じてきたような,業務請負業者によって雇用されるブラジル人が大きな位置を占めるようになった日本の周辺の労働市場の現状をどこまで説明できるのかがわからない。

「第3章 『ガテン』系への道—労働への適応,消費への誘惑」はムスリム労働者が「耳穴っこ(優等生的)戦略」と「野郎ども(非優等生的)戦略」という二つの生存戦略のどちらかを通じて日本の肉体労働者の文化に適応することにより厳しい労働に適応して労働市場での地位を向上させたことを説明するだけでなく,相対的に劣悪な労働市場に適応するために後者の戦略を採った場合に浪費的な「ガテン」系の消費行動様式にも適応して貯蓄ができなくなる状況を明らかにしている。第2章でスチュアートの「政治的必要」という概念を用いて消費行動様式の変化の説明を試みているのとは対照的に,ウィリスとブルデューの概念を用いて説明を試みており,理論的解釈については共著者間での統一が図られていないことがあらわになっている。

「移民コミュニティと越境するネットワーク」と題された第2部は第4~6章から成るが,「第4章 越境する食文化—滞日ムスリムのビジネスとハラール食品産業」は1990年代の在日ムスリム人口の増減につれて拡大・縮小したハラール食品産業,特にパキスタン系ハラール食

品店について論じている。1990年代末の調査に基づくため資料価値は高いものの,現時点でパキスタン系のハラール食品店がどれくらいのシェアをもっているのかがわからない。都内にはミャンマー系のハラール食品店が多いし,ウェブ上でも日本語で検索する限り,パキスタン系ではなさそうなハラール食品店が多いように見受けられる。

「第5章 トランスナショナルな企業家たち—パキスタン人の中古車輸出業」はトランスナショナルなネットワークによる中古車輸出ビジネスの手法とパキスタン等における輸入規制の変化と国内競争激化にともなうビジネスの変遷を内部情報にも基づきながら詳細に説明しており,エスニック・ビジネス以外の研究者にとっても貴重な情報を提供している。実際,「自動車リサイクル法」による解体業者に対する影響についても触れていることから,この研究は行方不明の中古車の台数に対する同法による影響を研究する環境経済学者にも注目されている。また,国際結婚を契機とする在日パキスタン人の被用者から自営業主,さらに経営者への職業移動や移動前から現在までのライフヒストリーの事例紹介は一般読者にとっても興味深いものであろう。

「第6章 イスラーム・ネットワークの誕生—モスク設立とイスラーム活動」は国内における近年のモスク急増とその背景,タブリーギー・ジャマアト(1920年代インド発祥の草の根的イスラーム運動)の信仰実践活動について論じている。ネットワークを扱っているものの,経済活動ではなく宗教活動が軸となっている点で異色の章である。モスク設立資金の基礎としては経済活動があることやモスクでのネットワークが起業やビジネス情報交換に役立っていることにも触れられているが,モスク設立適齢期に達したパキスタン人中古車業者等の経済状況

やその地理的分布とモスクの分布の関係についてもう少し詳しく論じてほしかった。

「ふたたび越境するという経験—故郷に帰ったムスリム移民」と題された第3部は第7～8章から成るが、「第7章 滞日経験のバランスシート—帰国の経緯とその後の状況」は元在日ムスリムのイラン人とバングラデシュ人の帰国理由・送金状況と帰国後の職業移動・資産形成について論じている。帰国理由として家族関係の理由が特にイラン人で多いことが意外であった。在日ムスリムについて送金額の用途を定量的に示したものはほとんどないようなので、非常に貴重な資料と言える。また、在日ムスリム以外でも職業移動を定量的に示した研究は珍しいし、帰国後に起業した者が多く、恵まれた階層・家族状況の場合に成功する確率が高いという結論は頷けるところである。

「第8章 消費社会のスペクタクルとトランスナショナリズムの逆説—バングラデシュの移民家族と開発される欲望」は樋口・稲葉両氏の社会学者としての面目躍如の最終章で、上からのトランスナショナリズム（グローバル資本、国際機関、メディアの活動の産物）と下からのトランスナショナリズム（移民が出身地と移民先の社会を結びつける多層的な社会関係を形成・維持する過程）の関係をバングラデシュの帰還移動者における消費の位相の中で考察することを試みている。具体的には、「北での消費」が帰還移動者による起業等を通じて「南での生産」を生み出す可能性とともに、「北での生産」が帰還移動者による「社会的送付」等を通じて「南での消費」を生み出すような欲望を開発するが、成功した帰還移動者以外は消費から剥奪されるため、さらなる国際移動者送り出しを促進する可能性を8人の帰還移動者の事例によって示している。そして『『消費社会のスペクタクル』が生み出すのは、移民によるグローバル

資本の補完という『トランスナショナリズムの逆説』なのではないか」(p.269)と結論づけている。当初、最終章の結論がこのようなものになるとは想像できなかったが、ヒト、カネ、モノの国境を越えた自由な移動とされるグローバル化に制約を課しているのが南北の国民国家であり、その度合いが北の非キリスト教国家と南のイスラーム国家で強いとすれば、移動するヒトとカネの間に補完関係があるのも頷けよう。

序章の紹介からセンチメンタルな内容の書物を想像した読者もいたかもしれないが、本書は上述のとおり、ネットワークと経済活動（労働）を軸としながら「滞日ムスリム移民の活力ある実態・現実を、来日から帰国後までを射程に収めて明らかにしたフィールドワークの成果」（表紙キャッチフレーズ）としての良書であるので是非とも一読をお勧めしたい。最後に、今後の課題と思われる点を序章で示された二つの分析視角に沿って述べてみたい。序章で樋口氏は①個々人の物語とネットワークのダイナミズムの重視を分析視角の一つとして採用するとしており、それが本書の第1章、第2章、第3章、第6章で実践されている。しかし、下記の評者の個人的経験が物語るようにエスニック・レストランやエスニック食品店はネットワークの結節点としての重要性も持っている。そのような視点を含めて第4章が再構成されなかったのは残念である。また、本書で扱われたムスリムのネットワークは主として男性を中心に形成されたものであるが、エスニック・レストランやエスニック食品店については日本人配偶者が形成する日本人親族やムスリマ（ムスリム女性）のネットワークについての言及ももう少し必要かもしれない。特に、福田（2004）や工藤（2008）の著作でも示されているとおり、国際結婚夫婦による自営業はエスニシティとジェンダーが交錯し、それらに伴う地位の不整合性が顕在化

する場でもあるので、多くが日本人女性と結婚をしている在日ムスリム自営業者のネットワークを分析する上ではジェンダーの視点にも注意を払う必要がある。

また、序章で樋口氏は②トランスナショナリズムが示唆する超国家的な生活世界へのアプローチを分析視角の一つとして採用するとしており、それが第5章、第7章、第8章で実践されている。しかし、それら各章に示されたようなトランスナショナルなものを超えるようなグローバル化の実態もあるように思われる。ヨーロッパでイラン・レストランに行くと店主等に日本で働いていたことがあると言われることが少なからずあるが、ベルギーでレストランを営むイラン人夫婦が北関東で7～8年働いていたと言っていたことを関西のイラン・レストランの店主に伝えたと、夫の兄弟が近くで中古車関連の仕事をしており、しばらく前に一緒にそのレストランを訪問したとのことであった。このような多国間での移動はイラン人に限ったことでもないようであるし、日本で蓄えたと思われる資金の投資先にしても出身国やビジネス中継国とは限らず、ヨーロッパという場合も少なくな

い。イラン人にしてもパキスタン人やバングラデシュ人にしても、ネットワークが欧米にも広がっている場合が少なからずあるので、そのようなグローバルなネットワークを通じたムスリム、カネ、モノの移動を研究することも将来の課題の一つであろう。

(樋口直人・稲葉奈々子・丹野清人・福田友子・岡井宏文著『国境を越える一帯日ムスリム移民の社会学』青弓社、2007年10月、278頁、定価2,000円+税)

(こじま・ひろし 早稲田大学社会科学総合学術院教授)

【引用文献】

福田友子 (2004) 「国際結婚とエスニック・ビジネスに見るジェンダー関係」伊藤るり (編) 『現代日本社会における国際移民とジェンダー関係の再編に関する研究』(2001～03年度科学研究費補助金成果報告書) pp.155-181.

Kojima, Hiroshi (2006) "Variations in Demographic Characteristics of Foreign 'Muslim' Population in Japan: A Preliminary Estimation," *The Japanese Journal of Population* (<http://www.ipss.go.jp/index-e.htm>), Vol.4, No.1, pp.115-130

工藤正子 (2008) 『越境の人類学—在日パキスタン人ムスリム移民の妻たち』東京大学出版会。

●敗戦直後の政治・社会運動の黎明期をリアルに描き出す、共同研究の成果

「戦後革新勢力」の源流

占領前期政治・社会運動史論 1945-1948

法政大学大原社会問題研究所／五十嵐 仁編 A5判上製・3900円(税別)

敗戦直後の食糧闘争から社会党の結成・共産党の公然化や、それとの関連で発展していく労働・農民運動。さらに、青年・学生、女性運動の展開…戦後革新運動の黎明期を史実に基づいて解きおこす。

大月書店 〒113-0033 東京都文京区本郷2-11-9 / 電話 03-3813-4651 (代表)
<http://www.otsubokushoten.co.jp/>